

「メンタルフレンド活動」における メンタルフレンド自身の主観的体験

河内 浩美¹⁾・中村 恵子¹⁾・小林 正子¹⁾
丸山 公男²⁾・平川 毅彦²⁾

1) 新潟青陵大学看護福祉心理学部看護学科 2) 新潟青陵大学看護福祉心理学部福祉心理学科

Subjective Experiences of Mental Friends in Mental Friend Activities

Hiromi Kawauchi,¹⁾ Keiko Nakamura,¹⁾ Masako Kobayashi,¹⁾
Kimio Maruyama,²⁾ Takehiko Hirakawa²⁾

1) NIIGATA SEIRYO UNIVERSITY DEPARTMENT OF NURSING

2) NIIGATA SEIRYO UNIVERSITY DEPARTMENT OF SOCIAL WELFARE AND PSYCHOLOGY

要旨

本研究の目的は、平成19年度より開始された本学の現代G P「メンタルフレンド（以下MF）活動による地域福祉展開」について、MF自身のMF活動に対する主観的体験を明らかにし、MF活動継続にむけたサポートシステム確立に向けての知見を明らかにすることである。本学のMF活動に登録し定期的活動を実施しているMF5名を対象にした質的記述的研究である。分析の結果、MF活動を支援するものとして、活動開始前の特徴とし施設の子ども達を焦点とした【癒しの提供】【活動への期待】などがMFへの登録動機として語られた。活動後では【自己の成長】【自己の癒し】などMF自身について語られた。また、MF活動を阻害するものとして【活動時間調整の困難さ】【子ども認識の施設職員とのズレ】等、MFが大学に期待するものとして【子ども達の施設での生活イメージづけ】【MFの交流機会の提供】等が語られ、MF活動継続する上で早急な対応が必要とされることが明らかとなった。

キーワード

メンタルフレンド、主観的体験、サポートシステム

Abstract

The present study aimed to elucidate the subjective experiences of mental friends (MFs) in MF activities conducted as part of the “Development of Community Welfare Through Mental Friend Activities”, a Support Program for Contemporary Educational Needs (Contemporary GP project) initiated in 2007 at our university, in order to obtain information for establishing a support system for the continuation of MF activities. A qualitative descriptive study was conducted on five subjects who were registered as MFs at our university and regularly performed activities. As factors supporting MF activities, those focusing on the children at facilities, such as “provision of healing” and “expectations toward activities”, were identified as motivations for registering as MFs prior to the start of activities, while factors related to self, such as “personal growth” and “personal healing”, were observed following activities. Factors hindering MF activities included “difficulty in adjusting activity times” and “differences in recognition of children among facility staff”, while expectations of MFs toward the university included “depiction of the children’s lives at facilities” and “provision of opportunities for interaction among MFs”. These findings suggest that measures promoting the continuation of MF activities are urgently required.

Key words

mental friend, subjective experience, support system

I 緒言

メンタルフレンド（以下MF）活動とは、平成3年に当時の厚生省が事業化した「ひきこもり・不登校児童福祉対策モデル事業」の一環として全国の児童相談所が中心となり「ふれあい心の友訪問活動援助事業」として開始されたものである。本学におけるMF活動は、平成13年度から本学の押木泉教授が児童相談所を皮切りに不登校児を対象に取り組んできた活動を基盤とし、「メンタルフレンド活動による地域福祉展開～ひきこもり不登校児や長期入院患者の教育・福祉・看護への学生参加型トータルケアシステムの開発～」とし平成19年7月に文部科学省の「現代的教育ニーズ取組支援プログラム（以下現代GP）」とし選定され、平成22年3月まで取り組まれた。その主な活動は、子どもと価値観を共有し、彼らを支え、気持ちを代弁し、関係を促進し、子ども達をつなぎ、そして発達成長のモデルとして機能することを念頭に、お兄さん・お姉さんの立場から子ども達とふれあいながら心のサポートを行い、子ども問題の解決支援を目的としたものである。¹⁾

これまで本学のMF活動²⁾についての実態把握調査³⁾や小児病棟における活動調査より、MF自身の成長や効果、活動継続にあたりMFが捉えている課題を示すことができた。現代GPとしての取組期間は終了となったが、今後もMF活動が継続的に地域展開されるよう、発展的自立体制の確立を目指している。そこで本研究は、MF自身が活動に対しどのような主観的体験をしているかを明らかにすることで、多岐にわたる施設での活動継続に向けたサポートシステム確立に向けての知見を明らかにすることである。

II 研究方法

本研究は、MF活動におけるMF自身の主観的体験に焦点を当てており、帰納的アプローチによる研究が適していると考え、質的記述的研究方法とした。

1 研究対象

本研究の対象者は、定期的にMF活動が実施されている病院および児童相談所に活動登録し複数回活動を行った学生である。

2 データ収集方法

対象者へ、事前に本研究の目的と方法を説明し同意を得られた後、個別に大学内の個室ゼミ室にて60分程度の半構成的面接調査を行った。データの収集期間は2009年3月上旬～中旬および2010年2月下旬～3月中旬であった。

面接内容は、MF活動開始のきっかけ、MF活動をしてどうだったか、MF活動を行ってからの自分自身の変化などについてであった。

3 データ分析方法

本研究目的に照らし構造構築に適した修正版グランデッド・セオリー・アプローチ法⁴⁾（以下M-GTA）を採用した。録音した面接内容より逐語録を作成し、M-GTAの分析手順に沿って、分析ワークシートを作成した（表1）。MF活動に対するMF自身の主観的体験と思われる内容をヴァリエーションとし、類似したヴァリエーションについて定義を設け概念を作成した。更に、作成した概念を比較検討し、関係性を明らかにし、カテゴリを抽出した。そこからMF活動におけるMF自身の主観的体験を説明できる構造図を作成した。

表1 概念名〈視野の拡大〉ワークシート例

概念名	視野の拡大
定 義	施設への訪問や、他のMFや子どもたちとの関わりより、新たな知見を得たり自身の成長を感じる事
ヴァリエーション	<p>A25：明るかったですね。なんか、確かにそこまで暗いイメージがあったわけではなかったんですけど、お子さん自体がすごく治療とかで疲れてるんじゃないかなって思ってたんですけど、全然そんなことはなくて、普通に明るくて、もちろん、体調の悪いときはあるんだろうけど、いいときはその…なんていうんだろう…良い時を元気いっぱいにあらわしてくれて、それはそうですね、ちょっと想像していたのとは違ったし…。</p> <p>A99：とても刺激になっています。何も無く学校生活をダラダラと過ごすよりは絶対いいなと思っていて、自分自身のアンテナが強くなるっていうか、キャッチする…やっぱり、関ってるぶんだけ、いろんなものに興味を持って、そこからまた得る情報があって、そこから広がる。</p> <p>B33：…人を考えるようになりました。（人を考える？）何か、メンフレをやった後で、私何を言ったかなと。髪の毛とか抜けちゃっているのに、私、髪の毛長いし女の子に好きそうなゴムとかしてるしそのことで私、チョロッと言ったりするだろうし、いろいろ考えることとかありますよ。チョロッと何か、入院嫌なんだよとか子どもがチョロッと行ってきてくれたりするの、こういうとき私何とてたかなとかよく考えるようになったんでー</p> <p>B34：悪いこと言ったかな、とかこれは言わないほうがよかったとか反省とか自分の行動についても考えるようになりました。</p> <p>C62：…メンタルフレンドは1年間という長い時間の中でいろんなお子さんと関わる事ができて、視野も広がったなって思いますし、長期間で接するので、成長もわかる気がします。</p> <p>C70：…今振り返ってみると、自分のためになったっていうか、自分が成長するための手段じゃないですけど、自分が成長することが出来たので、自分のためになったっていうのがあります。</p> <p>C71：子供がもっともっと好きになれたっていうことと、<u>かかわり方も始める前とは変わったんじゃないかなって</u>思います。それまでは、定期的に子供さんと関ることがなかったの、おそらくかかわり方もその経験を経て学んだ…。</p> <p>D96：変わった…メンフレに行き始めてもっと小児科に興味を持ったものもあるし、あとは、子ども達のことを考えてる時間っていうものもあるし、</p> <p>D102：福祉の人とかやはり何回も来てるので、すごく上手くて、そういうのを盗み見て、子供とかかかわりの対応とか、話しかけ方とか、本の読み方1つでさえも凄い分かって、自分もそういう風にできるようになってきたなって…。</p> <p>F29：…児童相談所に行くようになってからかな。なんかその、ボランティアに対して、なんかちょっと疑問じゃないんですけど。講義で先生が、「子どもはけっこう大人の都合に振り回されてる」みたいなこと言ってて。そのボランティアって、<u>自分の暇な時に行くわけじゃないですか。って言うことは、自分の都合でいってるってことは、児相相談所にいる子たちに対して、自分の都合で接してるんだよなって思ったら。なんか、ボランティア（笑）って善し悪しなのかなって思いましたね。</u>Bの児童相談所に行き始めて、1対1の関係になってから、なおさら、けっこう深く思う部分もあって。どお～なんだろうなあって。その子のためになっているんだろうかって（笑）。思う部分が大きいです。</p> <p>F54：…児童相談所とC（児童養護施設）で関わっている方が、一回あたりが濃いですよね。濃密な時間とかいうか、を過ごすので、そっちの方の関わりの方が、ゆくゆく生かしているかなあみたい。やっぱり、その、言葉使いとか凄く気使ってますよね。これ言っているのかどうなのかとか、これ言ったらこの子どんな反応するのかっていうのを、すごく考えさせられるのは、児相と養護施設なんですよ。</p> <p>F55：その子たちの態度とかを、すごい考えながら関わってるんで。まあ、そうしたことで、なんか言っても子ども大丈夫とは、思わなくていいとかいうか。今後、将来そういう子と関わる上でも、すごい考えて、気使ってじゃないですけど、関わりななきゃって思うんで、そこはすごいゆくゆく生かしていけるかなとは思っています。</p> <p>F74：なんか。物事を考えるようになったって思います。一つの事に対して。結構こう、あまり何も、そんなに深く考えないでやってきたんですけど。こうやって（メンタルフレンドの）活動したり、実習を通して。その一つの事柄に対する意味とか、自分はこう思ってるけど、他はどうなんだろうとか。こう動いたらどうなるんだろうとか。すごい一つ一つに対して考えるようにはなったと思います。</p>

4 倫理的配慮

対象者には、本研究の目的と方法を口頭および文書で説明し承諾を得た。研究への協力は対象者の自由意志であり、協力の有無によって不利益が生じないこと、いつでも協力を取りやめることができることを保障した。また、話された内容については、事前に同意を得て録音し、対象者本人に内容の確認を行った後に使用すること、今後学術集会で発表予定であること、個人情報保護について個人が特定できない処理をすること、録音データは分析終了後に全て破棄することについて説明した。

III 結果

1 対象の属性

対象者は、本学の学生6名であり、福祉心理学専攻3名、看護学専攻3名であった。MF活動場所は、小児病棟4名、児童相談所2名、児童養護施設1名、小学校1名であった。これまでに活動を行った施設数は、3ヶ所1名、1ヶ所5名であった。性別は対象者全員が女性であった。

2 MF活動におけるMF自身の主観的体験について

MF活動に対する主観的体験と思われる内容のヴァリエーションより、29の概念と13のカテゴリが抽出された（表2）。カテゴリを

表2 メンタルフレンド活動におけるメンタルフレンド自身の主観的体験

カテゴリー	概 念 名
癒しの提供	病児の遊びの提供 母の休息確保
活動への期待	知らない世界体験 社会活動の拡大
これまでの経験	子どもとの関わり体験 病児との関わり
自己の成長	視野の拡大 修得知識の実践 他職種への興味や再理解 社会人マナーの習得 対人関係調整力のアップ 子ども達の現実認識
自己の癒し	子どもや母らとの信頼関係の構築 自身の遊び
活動への後押し	親密感 承認されるという経験 生活としてのMF活動
活動時間調整の困難さ	スケジュール調整の困難さ 活動休みへの罪悪感 MF活動と学業両立からのストレス
子ども認識の施設職員とのズレ	子ども認識の施設職員とのズレ
施設職員とのコミュニケーション不足	施設使用についての戸惑い MFと施設職員との関わり不足
子ども達の施設での生活のイメージづけ	子ども達の施設でのイメージづけ
他学生へのMF活動周知	他学生へのMF活動周知
MFの交流機会の提供	情報交換 MF同士の交流
心理的サポート	心理的サポート

【 】, 概念を< >で示す。また、各カテゴリーに関するデータは、「 」内に対象者毎に付けた任意のアルファベットと返答順に付けた番号と共に示す。以下にMF活動に対する主観的体験の背景について触れながら説明する。

1) 【癒しの提供】【活動への期待】

病院でのMF活動への登録にあたり、子どもや親については、単調化しやすい入院生活の中で、遊びを通し子ども達に変化をもたらそうとする<病児の遊びの提供>や、MFが子どもと関わることで<母の休息確保>が得られ、両者にとって【癒しの提供】ができることを期待していた。

また、MF自身については「B15：小さい子ってどんなだろう、実際に病院って何だ

ろう」「E20：どんな子がいるのかなって。見相ってあんまりいいイメージなかったりするから、イメージを変えたかった。」とこれまでに経験したことのないことへの憧れや興味を示す<知らない世界体験>としてや、「E15：体調崩したときに…ボランティアからちょっとずつ初めて、社会になれていこうと思って。」と学童保育のアルバイト経験を踏まえ、社会と関わる機会を広げ<社会活動拡大>していこうとすることを【活動への期待】として語っていた。

2) 【これまでの経験】

子ども達との関わりについて、MF活動を開始前の体験として「A2：（病弱な甥っ子を）お母さんが忙しい時とか預かる機会があったり、仕事で出なければいけない時とか

に、代わりに病院で面倒みる機会とかがあって」「C20：（小児科病棟での実習で）物を一緒に作ったり、歌を歌ったりしてそういうのがすごく楽しくて」といった入院している子ども達と遊んだり、面倒をみたりしたことがある<子どもとの関わり体験>、活動開始後にMFとして実際に体験していた<病児との関わり>といったMF活動の開始前後における【これまでの経験】とし語っていた。

3) 【自己の成長】【自己の癒し】【活動への後押し】

これら3つのカテゴリは、MF活動が開始後の体験として語られたものであった。

まず、施設への訪問や、他のMFや子ども達との関わりより、新たな知見を得たり自身の成長を感じたりすることを<視野の拡大>として捕らえ、講義での学びや身近な保育士や他学科のMFといった他者から学び得た子ども達との関わり方を<修得知識の実践>として試みたり、他者の子とも達との関わり方を見たり、話をしたりすることで<他職種への興味や再理解>が進んだこと、MFという学外での活動を通して<社会人マナーの習得>につながったと語っていた。また、子ども達との関わりからは、「D59：ずっと仲良く遊んでいた子が治療始まって、来られなくなって、髪の毛抜けるし、顔色がすごく悪くて、それを見てたのが苦しかった」とそれぞれの環境におかれている状況下で見せるありのままの姿を知る<子ども達の現実認識>や、何度となく繰り返される、子ども達の乱暴な言葉使いや対応への慣れを、自身の日常生活に役立てている<対人関係調整力アップ>として語り【自己の成長】と認識していた。

次に、「B18：子ども達が名前を覚えてくれたり、お姉ちゃんって抱きついてくれたり」「E65：児童相談所の子は、環境的にも精神的にもわりとキツイ子が多いんで、なかなか警戒心が強くなってるので、笑顔を見せてくれることによって警戒心を解いてくれ

たのかなあ」と子どもや母親らが自身の思いを表出してくれることで<子どもや母らとの信頼関係の構築>や、子どもと一緒に遊ぶことが、ストレス発散であったり、自身の気分転換として<自身の遊び>となっていることを【自己の癒し】としてとらえ語っていた。

子ども達が名前を覚えてくれたり、笑顔を見せてくれたりすることで、子ども達と一定の距離感が縮まったと<親密感>を実感したり、「C46：「来てくれてありがとうね」って言われて、「子ども達いつも喜んでるよ」って教えてくれるんでありがたい」「E42：学校とは違う私を認めてくれる場所、待ってってくれる人がいるようなところ」と活動に際し、子どもや活動場所の人々から好意的に受け入れてもらえているという<承認されるという経験>として語り、MF活動を「B42：部活やっていたんですけど、わりとね、なんかそれに近くなっているな…楽しいし、嫌なこともあるけど、でも楽しい」「E69：大事な生活活動の一部」といったように<生活としてのMF活動>と語っていた。

4) 【活動時間調整の困難さ】【子ども認識の施設職員とのズレ】【施設職員とのコミュニケーション不足】

これら3つのカテゴリについても、MF活動が開始後の体験として語られたものである。

活動時間を確保するにあたり、授業や実習、バイトなどとの調整が思うようにいかないことを<スケジュール調整の困難さ>として、また「E94：行かなきゃいけないなって思うんですけど。やらなきゃいけないことが、いっぱい、いっぱい。息切れしてきているんで」と活動したいと思っていることが<MF活動と学業両立からのストレス>として語られていた。そして、MF人員の不足により、定期活動がされないことについては<活動休みへの罪悪感>として感じていた。活動を行うにあたり、時間の確保や学業との両立からのス

トレス、人員不足といったことより【活動時間調整の困難さ】を語っていた。

「F39：聞かされていた彼女のイメージとは、関わると全然違うじゃんって思った」

「F43：聞いただけじゃ、やっぱ分からないんだなって思いました」と施設職員がとらえている子ども達の姿と、実際に関わることでMF自身がとらえた姿について【子ども認識の施設職員とのズレ】として語っていた。

使用が可能とされている控室が使えないなど<MF控室使用への戸惑い>や「F99：どう答えていいのか困った部分もあったりしたんですけど。それを相談していいのかなって思うし、（施設の方が）忙しそうなんですよ…だから呼び止めて、ああだこうだ言ってもらえないっていうのもある」「F100：やっぱその施設で言えるみたいな。相談できるっていう環境はほしい」といったような<MFと施設職員との関わり不足>について語っており、【施設職員とのコミュニケーション不足】を体験していた。

5) 【子ども達の施設生活のイメージづけ】

【他学生へのMF活動周知】

「A115：ある日、その子に「お姉さんのお部屋はどこ？」って聞かれて、お家はどこって意味なんだなって」といったようなやりとりから、子ども達とMF自身の暮らしの感覚の違いや、「E29：やっぱり怖かった…なんか言葉がキツイ子とかが多かったんで」「E31：普段そういう世界、中にいないから、なんか、ちょっと。う～ん。」といった戸惑いについて語っており、活動開始前の子ども理解を深めるための【子ども達の施設生活のイメージづけ】をのぞんでいた。

また、「A119：（学内演習の調査でMF活動では）直接活動することと、おもちゃや飾り付け作る活動があるのを伝え、知っていましたが聞いていたら意外に知らない人が多かったので、そうサポート的な活動があるという部分だったり、活動に行く前に不安に思っ

る方が何人かいらっちゃって、先輩方からこういう活動は楽しいですよって、説明の機会があればよいんじゃないかなって思いました」と活動の輪が広がるような【他学生へのMF活動周知】の必要性を語っていた。

6) 【MFの交流機会の提供】【心理的サポート】

継続した1対1での関わりが取りにくい病院での活動においては、「A111：今、病院がどんな状況なのかなとか。後はどんな風な遊びが流行っているのかとか。そういうのは凄く役に立ちます」と語っているように共通認識をもち活動できるための<情報交換>や、MF活動意外における<MF同士の交流>について語っており、活動にあたり【MFの交流機会の提供】が必要としていた。

MF活動の中で、「A78：活動のうえでどうしても切なく思ってしまったこととかも、（GP室の先生に）たまにお話したり」とMF自身が処理できない戸惑いや悩みなどの思いを他者に伝え受け止めてもらう【心理的サポート】の経験を語っていた。

3 本研究で得られたMF活動におけるMF自身の主観的体験（図1）

MF活動におけるMF自身の主観的体験の特徴は、『MF活動を支援する』『MF活動を阻害する』といった性質により示すことができた。

『MF活動を支援する』性質からみると、MFへの登録は、子どもや母親への【癒しの提供】やMF自身の<知らない世界体験>や<社会活動の拡大>といった【活動への期待】により行われ、活動開始以前の病児との関わりや小児病棟での実習での【これまでの経験】を肯定的にとらえていることと合わせ、MF活動を支援するものとなっていた。その反面、子ども達とMF自身の暮らしの感覚の相違については戸惑いをもち、大学に期待することとして活動開始前の【子ども達の施設生活の

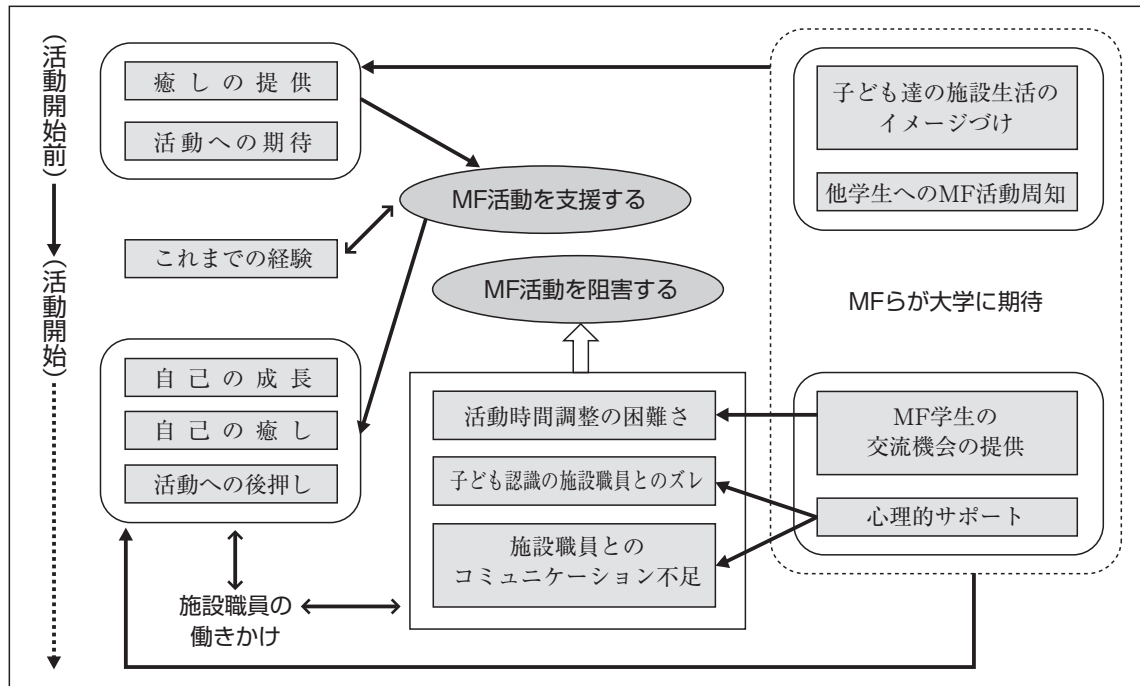


図1 メンタルフレンド活動におけるメンタルフレンド自身の主観的体験構造

イメージづけ】をあげていた。MF活動を繰り返し行うことで、MFは【自己の成長】を自覚し、＜子どもや母らとの信頼関係の構築＞を実感し、子ども達との関わりを＜自身の遊び＞としてとらえることで【自己の癒し】ともなっていた。また、施設職員からの働きかけとして＜承認されるという経験＞は【活動への後押し】となっていた。

次に『MF活動を阻害する』性質からは、MF活動において学業や自身の余暇時間確保ができず、思うようにMF活動が行えないという【活動時間調整の困難さ】、MFが実際の活動で体験する【子ども認識の施設職員とのズレ】や【施設職員とのコミュニケーション不足】の拡大は、MF活動を阻害するものとして影響すると考えられた。阻害要因に対し、MFらはスーパーヴァイザーからの【心理的サポート】により対処していた。また、大学に期待することとして【MFの交流機会の提供】やさらなる【心理的サポート】をあげていた。

IV 考 察

1 MF活動と自己の成長

MF活動の機能は、子ども達と触れあひながら心のサポートを行い、不登校やひきこもりといった子ども達における問題の解決支援を目指すものである。本研究の結果からは、自身の変化とし「色んなものに興味をもつようになり視野が広がった」「人を考えるようになった」といったように＜視野の拡大＞として語られていた。また、活動においては、対象となる子どもや保護者のみならず、施設職員やG P指導室の教職員と身近に接し実社会で活動することで、社会人としての立ち振る舞いを学ぶ機会として＜社会人マナーの習得＞に繋がっている。更に、様々な環境下にある子ども達との関わりから＜子ども達の現実認識＞を行い、関わり方のスキルを身につけることで＜対人関係調整力アップ＞となっている。伊藤らは、MF活動に関するMF自身の変化について「他人の立場や気持ちを汲み取れるようになった」「考え方が柔軟になった」「自分の新たな一面に気づいた」などの項

目より“成長”を挙げており、MF自身も大学生という青年期にあることを踏まえると彼ら自身の成長へも何かしら影響を与えているといえよう。

2 MF活動を阻害する要因と支援について

本学のMF活動が全学的取組として開始され漸く3年が経過したところである。それぞれの施設においても活動が定着してきたところである。また、長期にわたり同一施設で活動を継続するMFについて、大学の講義や自身の余暇と活動時間とのスケジュール調整の困難さ<や定期的なMF活動ができないという活動休みへの罪悪感>となり【活動時間調整の困難さ】としてMF活動を阻害する要因となっている。また、伊藤らは、MFの悩みに関するものとして、「担当職員との活動方針が合わなかった」「相談所職員と連絡を取るのが困難だった」との項目より“孤立・負担感”⁵⁾を挙げています。また、市根井らは、MF活動における児童相談所に関する課題・問題点として「対象児童、MF、児相職員との連携強化が必要」としている⁶⁾。本研究の結果においても、同様な【子ども認識の施設職員とのズレ】や【施設職員とのコミュニケーション不足】として挙げられている。現在、本学において確立された対応策がなされていない。そのためMF自身が、それぞれに他者への気持ちの投げかけを行い自ら【心理的サポート】を行わなければならない状況となっている。伊藤らは、実際の活動においては、児相相談所職員のサポートやスーパーヴィジョンがMFの不安を低減する機能を果たしているとし、また、MF活動に満足しているMFほど、友達的な関わりを取る傾向にあり、自分自身も成長したととらえていることより、MFとしての迷いも小さいことがわかるとしている⁵⁾。これらのことより、早急な対応策としてスーパーヴァイズが可能な人員配置の継続と、互いのMF活動における情報交

換の場として定期的なものとしての【MFの交流機会の提供】が望まれることが示唆される。また、専門的技術が十分でない学生にとって、対応に困った際にアドバイスが求められるような施設との連携強化も望まれる。

VI 結 語

MF活動を支援するものとして、活動開始前の特徴とし施設の子ども達を焦点とした【癒しの提供】【活動への期待】がMF活動への登録動機となっていた。活動開始後は、MF自身についての【自己の成長】【自己の癒し】を認識していた。また、MF活動を阻害するものとして【活動時間調整の困難さ】【子ども認識の施設職員とのズレ】【施設職員とのコミュニケーション不足】が挙げられた。MFが大学に期待するものとして、活動開始前の支援とし【子ども達の施設生活のイメージづけ】、活動開始後の支援として【他学生へのMF活動周知】【MFの交流機会の提供】【心理的サポート】が挙げられた。

謝辞

本研究に、ご協力いただいたメンタルフレンドの皆様には感謝いたします。

なお、この研究の一部は、平成21年度新潟青陵学会学術集会示説で発表した。

文献

- 1) 新潟青陵大学現代GP指導室. 新潟青陵大学現代GPブックレット メンタルフレンド活動による地域福祉展開－ひきこもり不登校児や長期入院児童の教育・福祉・看護への学生参加型トータルケアシステムの開発－. 9. 新潟:新潟青陵大学;2008.

- 2) 平成19年度新潟青陵大学現代G P 効果評価報告書. 57-69. 新潟:新潟青陵大学現代G P 効果評価グループ;2008.
- 3) 平成20年度新潟青陵大学現代G P 効果評価報告書. 48-61. 新潟:新潟青陵大学現代G P 効果評価グループ;2009.
- 4) 木下康仁. グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践－質的研究への誘い－. 東京:弘文堂;2003.
- 5) 伊藤美奈子. メンタルフレンド事業に関する実態調査－メンタルフレンド活動の実際と、その成長と悩み－. お茶の水女子大学人文科学紀要. 2001;54:277-289.
- 6) 市根井都ほか. 児童相談所におけるメンタルフレンド活動の現状と課題. 福島大学教育実践研究紀要. 1999;36:27-34.